

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：34403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03387

研究課題名(和文) J.S.ミルの貿易思想

研究課題名(英文) J.S.Mill's Idea of International Trade

研究代表者

藤本 正富 (Fujimoto, Masatomi)

大阪学院大学・経済学部・教授

研究者番号：30330103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、J.S.ミルの貿易思想を、「経済理論とその社会哲学への応用」という視点から、その全体像を描き出した。

ミルはリカードの比較生産費説から相互需要説へと至る分析において、世界的生産量の拡大とその分配を議論した。それは世界レベルでの経済的な豊かさをもたらすと共に、知的・道徳的進歩へも寄与する。幼稚産業保護と植民もこの系論である。ミルがトレンズに言及する際には、関税の議論が中心であり、そこでは需給論が分析に用いられている。関税は、一国レベルで貿易収支の有利化だけが目的であり、その賦課による価格上昇による需要量の減少から、世界的生産量を減少させるため、ミルにとっては好ましくないものである。

研究成果の概要(英文)： We ascertain J.S.Mill's idea of international trade as the application of economic theories to the social philosophy and to solving social problems.

Mill analysed the increase of the global production based on Ricardo's theory of comparative cost, and its distribution between nations based on the theory of reciprocal demand. This is for the advantage of the world. In addition to the economic advantage, Mill also raises the issue of 'intellectual and moral' advantage. His discussion of infant industries and immigration are also included in this case. Mill refers to Torrens in relation to the theory of supply and demand which was applied to the analysis of the effect of the tax on export and import. Mill analysed the change in the monetary amount of import or export in relation to the shape (or elasticity) of demand curves if the tax is imposed on the import goods or export goods. This analysis considers the advantage for a single nation, not for the world

研究分野：経済思想

キーワード：J.S.ミル 相互需要 比較生産費 リカード トレンズ 互惠主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 19世紀自由貿易運動に関するこれまでの研究では、自由貿易対保護貿易という対立軸に基づいて研究が進められてきたといえる。具体的には、一方的自由貿易を主張するマンチェスター学派やドイツ、アメリカの保護主義など、個々の学派についての研究が進められてきた。

(2) マンチェスター学派の一方的自由貿易、ドイツ関税同盟やアメリカ保護主義に関しても、自由貿易に関しても、関税を如何にするかということに、特に議論の焦点が当てられる。本研究で研究対象とするロバート・トレンズが主張した互惠主義も同じであり、「相手が関税を課すならこちらでも課すべきであり、相手が関税を廃止するならこちらでも廃止すべきである」という互惠主義は、現在でも自由貿易の論争の主要な争点になっている。

2. 研究の目的

(1) J.S.ミルが意図した国際貿易は、これまでの関税を中心とした議論とは、次元が異なっている。ミルの貿易思想を理論面で見てみると、まず比較生産費説に基づく国際分業の進展と世界的生産量の拡大があり、この増大した生産物を分配するための論理として、交易条件である相互需要説が展開される。つまり、根底にあるのは、世界レベルでの経済的豊かさなのである。さらに、ミルは、このような貿易の経済的効果に加えて、貿易を通じた国々のつながりは、知的・道徳的效果をもたらすと主張する。ミルが『経済学原理』(1848)の序文にて主張しているように、ミルの経済学は、経済理論を社会哲学へ応用することが大きな枠組として設定されているのであり、国際貿易に関しても、世界的生産量の拡大とその分配という経済的側面と、その応用として、人類の知的・道徳的進歩という社会哲学的側面へと視野が拡大されているのである。本研究の目的は、このような枠組の中で、ミルの貿易思想の全体像を提示することにある。

(2) ミルの『経済学原理』は経済理論とその社会哲学への応用という形で構成されている。国際貿易では、まず相互需要説の論理を把握し、それが知的・道徳効果へとどのように応用されているかを明らかにする。

自由貿易対保護貿易という枠組において論点となる「関税」については、ミルは、相互需要説ではなく、需給論における需要の伸縮性の分析に基づいて、互惠主義に対する批判を行っている。関税による価格の上昇は、いずれにしても世界的生産量を減少させるものであり、ミルの自由貿易思想とは相容れないものであることを明示する。

自由貿易の例外あるいは自由貿易からの逸脱とも評価される「幼稚産業保護論」、「植

民論」は、将来的に世界的生産量の拡大に寄与する可能性があるものとして、ミルが時間制限を設ける形で容認していることを示す。

3. 研究の方法

(1) ミルの貿易思想を支える理論は相互需要説であるため、それを基にミルが貿易の意義を論じた『原理』第 編第 17 章「国際貿易」の論点を整理し、どのような形で相互需要説の理論内容と関連するかを明らかにしていく。二次文献では、杉山忠平(編)、『自由貿易と保護主義 その歴史的展望』(1985年)、ドナルド・ウィンチ『古典派政治経済学と植民地』(1975)などから、従来のミル貿易思想に対する評価を参考にし、ミル貿易思想に対する評価の正当性と誤謬を検証する。

(2) 関税に関する分析では、ミルは需給論を適用し、関税は価格上昇をとまなうため、需要量の減少を通じて、世界的生産量を減少させる方向に作用するものと理解している。そのため、ミルは、関税を政府による経済活動への干渉の効果の一つと考えている。その詳細な分析は、『経済学原理』第 5 編で展開されているので、その内容を内在的に解釈し、貿易思想との関連でその意義を検証していく。

一国レベルでの利益を目的とした関税の効果については、ロバート・トレンズの主張した互惠主義が有名である。つまり、相手国が関税を課すなら自国も関税を課し、相手国が関税を廃止するなら自国も関税を廃止するという貿易政策である。ミルの互惠主義批判については、理論内容と共に、トレンズとの関連性もふまえて検証していく。

(3) ミルの幼稚産業保護論を、『原理』第 編第 10 章「誤った学説を根拠とする政府の干渉」第 1 節「自国産業保護論」の内容を中心に整理し、ミル貿易思想の中での位置づけを検討する。ミルの幼稚産業保護論は、後発国であるがゆえに生産性は劣っているが、その生産性の向上の可能性がある産業は一定期間を区切って保護し、その成長を促すというものである。それゆえ、自由貿易の例外ではあるが、将来的に世界的生産量の拡大に寄与し、知的・道徳的效果も期待されるものと位置づけられるはずである。

(4) ミルの植民地論を、『原理』第 編第 11 章「自由放任主義あるいは不干渉主義の根拠と限界について」第 14 節「関係者以外の人々のためになされる諸行為の場合。植民」の内容を中心に整理し、ミル貿易思想の中での位置づけを検討する。また、ミルは、植民論に関して、ウェイクフィールドの議論に影響を受けているため、ミルの「ウェイクフィールド論」も検討する。

4. 研究成果

(1) S. Senga, M. Fujimoto, T. Tabuchi (eds). *Ricardo and International Trade* (Routledge 2017)に発表した Masatomi Fujimoto “J. S. Mill’s Idea of International Trade: The Inheritance from Ricardo’s Free Trade and Torrens’ Reciprocity”において、以下の点を明らかにした。

まず、J.S.ミルがリカードに言及する際には、比較生産費説から相互需要説に至るミルの貿易理論の根幹をなす議論に関する議論であった。それはリカードの比較優位の原理に基づく生産量の拡大に始まり、ミルの相互需要説による交易条件の決定、つまり、拡大した生産量の分配へと至る問題である。これは、世界的な生産量が拡大することによる経済的な豊かさの議論であった。また、ミルがロバート・トレنزに言及する際には、関税の議論が中心であった。ミルは、関税はその賦課による価格上昇のため需要量を減少させる。そのため、ミルにとっては、関税は世界的生産量を減少させるものとして否定的な評価がなされることを論じた。

次に、ミルの相互需要説と需要供給論の両方の理論において、ミル自身が需要の伸縮性 (Extensibility) と呼ぶものが、今日の需要の価格弾力性のエッセンスでもある支出額の変化として、価格低下による支出の増加、一定、減少という形の3つのパターンで分析されており、両理論とも同じ構造を持っていることを図形的に示した。

また、ミルが、相互需要説と需要供給説において需要曲線の弾力性に近いものを把握していたことにより、唯一の均衡点が決定されないケースが生じることを認識し、その問題を解決する手段として、資本の増加による生産量の拡大により複数均衡が解決されると考えていたことを指摘した。この資本の議論は、ミルの考える資本量は固定的なものではなく、流動的なものであり、ミルの賃金基金説の撤回問題とも関連づけられるべき問題として、今後の検討課題として残される。

最後に、幼稚産業保護論と植民論は、比較生産費説から相互需要説へと至る、世界的生産量とその分配に関連する問題であり、将来的には世界的生産量の拡大へと寄与するものであり、さらに知的・道徳的效果を通じて人間の陶冶へと結びつく位置づけにあることを示した。

J.S.ミルの経済学の構想は、経済学という抽象的な理論を社会哲学に応用して検証することによって発展を遂げていくものとして描かれている。このミルの経済学の構想に基づいて、国際貿易では、相互需要説と需給論が経済理論として置かれ、それぞれが生産量の拡大とその分配の問題、関税の問題へと適用されて国際貿易を検討することによって、ミルの貿易思想が形成されていることが明らかになったはずである。

(2) ミルの関税論に関しては、トレنزの主張する互惠主義批判との関連で、2つの学会報告の中で議論した。

トレنزの互惠主義の中心をなす論理は、貿易相手国が関税を課す場合にはイギリスも関税を課すべきであり、そうしなければ交易条件がイギリスに不利になるというものである。そして、たとえイギリスがその工業製品に輸出税を課したとしても、相手国は以前と同じ数量のイギリス商品を購入するから、輸出税×輸出量(一定)の輸出額の増加があり、交易条件はイギリスに有利に作用するという議論である。

これに対して、ミルは、イギリス商品に輸出税を課した場合、貿易相手国の需要量の変化は3つパターンがあり、支出一定、支出増加、支出減少のいずれかであるが、トレنزが支出増加の1つしか考えていないとして、基本的にはトレنزの議論に賛成しつつも、完全な形で理論はミル自身によって完成されたと主張する。

ミルは、『経済学試論集』の序文の中で、トレنزが引き起こした論争が、経済学を再び抽象科学へと引き戻したとして、彼に大きな評価を与えるが、それは相互需要説ではなく、関税をめぐる議論であったことも明らかにしていた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Masatomi Fujimoto “J. S. Mill’s Idea of International Trade: The Inheritance from Ricardo’s Free Trade and Torrens’ Reciprocity” in Shigeyoshi Senga, Masatomi Fujimoto, Taichi Tabuchi (eds.) *Ricardo and International Trade*, (Routledge 2017)、査読無し、pp. 237-253

〔学会発表〕(計2件)

Masatomi Fujimoto, J. S. Mill’s Criticism for Robert Torrens’ Reciprocity in International Trade, 20th ESHET Annual Conference (26-28 May 2016, University of Paris 1, Panthéon-Sorbonne, Paris, France.)

Masatomi Fujimoto, J. S. Mill’s Analysis for Tariffs and Criticism for Robert Torrens’ Reciprocity, 経済学史学会第81回大会(徳島文理大学 2017年6月3-4日)

〔図書〕(計1件)

Shigeyoshi Senga, Masatomi Fujimoto, Taichi Tabuchi (eds.), Routledge, *Ricardo and International Trade*, 2017, 286

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 正富 (FUJIMOTO Masatomi)

大阪学院大学・経済学部・教授

研究者番号：30330103

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()